

---

## 最前線で闘った消防団の苦悩

(Jレスキュー・編 ドキュメント東日本大震災、イカロス出版、東京、2011、p.55-86)

2012年3月9日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

陸前高田市消防団は高田、広田、小友、米崎、矢作、竹駒、横田、気仙の8つの分団で構成される。団員数は条例定数が865名、実員が発災当日で749名。

津波により壊滅した市街地のほとんどは高田町に属し、高田分団の管轄である。高田分団の団員数は大坂淳分団長以下127名、だった。うち27名が死亡および不明(5月上旬現在で23名の遺体を確認)。現在100名で活動する。

### ● ものすごい音で襲いかかる黒い津波

「車で逃げていたら間に合わない」

そう判断した大坂分団長は、海の方を振り返らず駅通りを山側にむかって無我夢中で走った。この状況だと右に曲がっても、左に曲がっても死ぬし、まっすぐ進んでも250m行ったところで駅通りは高台に突き当たる。そこで津波につぶされるに違いない。一目散に走るうち、突き当たりに子どもの頃遊んだ本丸公園への抜け道があるのを思い出した。人しか通れない細い道を上がっていくと、すでにお年寄りや主婦など20人以上が避難していた。そこからは建物が死角になって海は見えないため、彼等はまだ、これから襲ってくる津波の恐ろしさを知らない。ものすごい津波がくるからここは危険だ、もっと上に登るように、と促すが、今度は腰が抜けて動けない。大坂分団長が一人一人正気を取り戻させるようにお尻をたたき、背中を押して上に登らせていると、バーンというものすごい爆音とともに衝撃が走った。

最初に襲ってきたのは、家を巻き込みながら押し寄せてくる津波の先端に舞い上がる、砂や土埃、木片などが混じったきめの粗い黒い埃だったのだ。一瞬にしてその埃に鼻をふさがれ、メガネは真っ黒に染まって何も見えなくなった。片方のレンズを拭いて顔を上げると、押し寄せる津波の本体が片目の視野いっぱい迫ってきた。一瞬にしてヘドロや砂を巻き込んだ真っ黒い海水が全てを覆い尽くし、あたり一面モノトーンの世界になった。聞こえてくるのは、津波映画のCGなどとは全く別物の、生まれて初めて聞く暴力的で破壊的な音だった。

もはやこれまで、と津波をみると、波は一方向から来るのではなかった。二つの波が勢いよくぶつかって、ほんの10mくらい先で激流の渦が起きている。直角方向の波の勢いを、それより大きな横からの波が吸収しているのだ。竹につかまって体を支えていた大坂分団長は、胸まで水に漬かりながらなんとか踏みとどまった。二方向からの波が勢いを相殺したこと、つかまったのが折れずにしなる竹だったこと、竹の節が握りしめる手をしっかり固定させたことが幸いした。

## ●誰よりも早く搜索活動開始

「分団長以下 12 名、これより搜索に入ります！」

明けて 12 日、彼等はまず給食センターに仮設テントを設けて避難している消防本部に赴き、消防長に報告した。6 時 45 分活動開始。消防団は自衛隊よりも警察よりも早く、壊滅した市街地に下りていった。消防団はそれぞれの体力に合わせて瓦礫の市街地あるいは山伝いと無理のないコースを行くことにし、最終の目的地である市民体育館に向かった。そこは 1 次指定、およびさらに危険が増したときの 2 次指定を兼ねた大きな避難所で、ここには少なくとも 6~700 人くらいが避難していたものと思われた。

が、その体育館は入り口側と反対側の壁がはぎとられ筒抜けになっていた。中に避難していた人はごっそり津波に吐き出されたのだ。

## ●つらい気持の中での遺体搜索

高田分団の当面の主たる仕事は遺体の搜索だった。遺体の搬送や管理は本来警察の仕事だが、最初の 2, 3 週間は消防団が搬送まで行った。遺体の数が多く搬送が追いつかないのだ。

一番ショックだったのは、13 日に市民会館で行った搜索だった。流されていない遺体が 55 体あり、何体もの遺体が複雑にからみあったり、津波で天井まで持ち上がったままぶらさがっていたり、コンクリートに押しつぶされて足だけが見えたりしていた。

あまりにも無残な光景が団員たちを落ち込ませた。

遺体の中には自分の同級生や友人、親戚や知り合いもたくさんいる。ほんの少し前に挨拶を交わしたり、一緒に飲んだり笑い合った人たちが、こんなに苦しげな表情で亡くなっている。その遺体を自分の目で見つけ、自分の手で運び出す。どれほどつらいことか。

陸前高田市といえば、避難所となった高田一中にマスコミがはりついて、TV でも毎日のように避難所生活の苦勞が伝えられた。が、人として最もつらい生活に耐えてきたのは、誰よりも彼ら消防団員である。大坂分団長自身も写真店である自宅の一切が流され、最愛の妻と娘を失った。助かっているものとばかり思っていた妻と娘は避難所のどこを捜しても見つからなかった。

4 月 30 日、陸前高田市消防団は遺体搜索を終了した。

## ●アマゾンやブログで集めた救援物資

被災後の高田分団の活動でもうひとつ、特筆すべきものがある。それは、必要な救援物資を、必要な数だけ、必要な被災者に直接届けるしくみにチャレンジしたことだ。具体的には Amazon の「ほしい物リスト」やブログ、ツイッターを利用した受援者側からの積極的な発信だ。

事の発端は、被災後 2 週間くらいあとに分団に通信ができるパソコンが差し入れられたこと。さらに、大阪分団長の友人がお見舞いに訪れ、陸前高田市の状況や高田分団がお風呂を欲していることなどをツイートしたことだった。ツイートしたとたん、東大阪市の市長、アマゾンジャパンとつながり、救援物資で陸前高田を救おうという気運が急速に盛り上がった。アマゾンジャパンが提案したのは、アマゾンのサイトにある「ほしい物リスト」の機能を応

用したもので、高田分団のアカウントを作成し、実際に高田分団が必要と思う商品と個数をそこにリストアップする。支援をしたい人はこれらを購入することで、商品が高田分団に直接届くというシステムだ。これなら不必要なものが届いたり、大量に届いて仕分けのための人手が必要になることもない。支援する側にとっても、自分の買ったものが直接相手に届く安心感と達成感がある。

### ●オレは「ほいど」になる！

「ほいど」というのは、この地方の言葉で乞食のことだ。発災3日後、大坂分団長は全団員を集めた朝礼でこう宣言した。「オレは今日限りほいどになる！」高田は他の被災地と違う。まるで原爆が落ちたように、市街地の何もかもが失われた絶望の被災地だ。あるべきところに、なにもない。被災者は、すべてを失い何も持っていない。それならオレがほいどになる。人様に頭を下げ物してもらえらなら下げ続ける、それで町民を守れるなら、いくらでも頭を下げる。そう覚悟を決めたのだ。高田分団は被災者のニーズを吸い上げ、欲しいと思うものをピンポイントで届ける小回りのきく被災者支援を始めた。

今の行政に大きな力はない。が、この土地にしっかり根を張った一人一人の人間力が、復興に向けたたくましい礎となって陸前高田の未来を作っていく。

(2011年5月13日取材)